



The・対談

『パプーシャ』

— ふたりの監督はパプー

氏間 佐藤さんはこの夏ポーランドに旅行をされ、アウシュビッツにも行ってこられたそうですね。映画『パプーシャの黒い瞳』のモデルになったロマ人(ジプシー)は第二次大戦中に少数民族の中で人口比では最も多くの人々が虐殺されたそうですね。

佐藤 そうなんです。アウシュビッツの発行している「アウシュビッツ・ビルケナウ/その歴史と今」(2015)という出版物によると、ロマは2万1千人もの人々が殺害されています。これはユダヤ人(100万人)、ポーランド人(7万~7万5千人)に次いで多数です。戦後70年の節目なので行く気になり、合掌してきました。

氏間 アウシュビッツ強制収容所解放70年に寄せての渡航ですね。本作『パプーシャの黒い瞳』(2013)が日本で公開され、故クシシュトフ・クラウゼ監督の作品は『借金』(1999)、『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』(2004)、『救世主広場』(2006)に続きこれが4作目ですね。ポ文協主催の映画祭やポーランド広報文化センターのおかげで日本語字幕での鑑賞が実現しました！

モノクローム映像と音楽の魅力

佐藤 ポーランド映画はモノクロームの作品が多いですが、今回もパプーシャの心情に合致したトーンが良く、今年はこの作品まで87本を劇場で観ましたが、私の中では今のところ外国映画ベスト3に入っていますよ。

氏間 そうですか。『イーダ』(2013)も昨年観て唸りましたが、本作も同じく記憶に刻まれた感じです。ポーランドならではの引きのショットによる平原の映像美、作曲家パヴルシキェヴィチのハイクオリティな音楽。こだわりのシーンの美しさにはため息です。それらが一層パプーシャの人生(1910頃~1987)の過酷さをとても際立たせていました。

佐藤 幌馬車の行列が行く原野の場面は“素晴らしい”の一語に尽きます。音楽はロマ調が目立ちました。ロマ自体も恵まれていませんが、この女性詩人パプーシャの生涯も痛々しいですね。15歳で無理に結婚させられ、国のロマへの定住政策、最後は詩集の出版による追放など、これでもか、

これでもかと過酷な状況でした。

ところで、『イーダ』を配給したマーメイド・フィルムズの「クロード・ランズマン特集」で上映された『SHOAH ショア』(1985)を初めて観たけど、凄い作品だった。(ドキュメンタリー/9時間 27分)〈於シアターキノ、7月25-28日〉

氏間 ランズマン監督はフランス人で現在90歳、第二次大戦のとき高校生でレジスタンスに参加。サルトルやボーヴォワールとの親交もあり、『パプーシャ〜』の時期とも重なりますね。多くの映画作品にいえませんが、価値観変動の中、絶妙なタイミングというかいくつかの偶然が作中の物語を生んだことがわかります。どの社会にも異なった人たちはいて、それが故に非常に魅力的であると同時に恐れや恐怖の対象になる。そういう異なるものとの出会いがテーマになっていました。

佐藤 私自身、ポーランドのことはあまり解っていないということを今回の旅行で痛感しました。「ジプシー」という蔑称がようやく「ロマ」になったのが最近のことで、アウシュビッツ唯一の日本人ガイド中谷剛さんは「ジプシー」という語はもう使っていないと強調していました。

民族の伝統を後世に伝える

氏間 ロマ人は常に移動していますし、(いわゆる西洋的)教育が必ずしも重要ではなかった。自分たちの記憶の痕跡を残すことができなかつたんですね。ヒエラルキーが激しい社会でもあり、誇り、矜持、自負というものがとても強い民族です。そういう中でフィツォフスキがロマ人の証言を集める役割を買ってでて、言葉で表現することをパプーシャに促したわけです。

佐藤 この映画で感じたことは、私は日本におけるアイヌ民族もこれに酷似しているなと思いました。文字を持たない点、狩猟民族、伝統的行事、外貌などが共通点だと思います。パプーシャに当たる

佐藤 晃一 × 氏間 多伊子

『の黒い瞳』をみて

シャの物語に命を与えた —



佐藤 単なる哀しみを描いただけでなく、観終わったあと「民族」や「時代」について考えさせられました。意外と重い映画だったと思いますね。

氏間 複雑であり多くのメタファーを含み、ある意味「喪失」についての映画だと私は感じました。ヨアンナ・コス=クラウゼ監督が来日し、インタビューのなかで「パプーシャは 로마人にとって誇りであったのか、恥であったのか、幸福だったのか、不幸だったのか」との質問に次のように答えています。「パプーシャやフィツォフスキがいなければ、多くのものが失われていたとは思いますが、人生の中の価値というもの、いずれも痛みをもって生まれて来るものだとは私は思うからです。なかなか決められない。A か B かの選択の間には、さまざまな多義性がある」とのべているんです。さすがのコメントです。

(さとう・こういち&うじま・たいこ)



のが知里幸恵と感じます。しかしアイヌは映画になかなかならないですね。北海道の先住民族をもっと尊重して然るべきだと思います。

氏間 たしかにそうですね。ところで今回配役の羅馬人たちはポーランド語も話し演出に関する技術的なことは、普通にわかり合えたそうです。主役の3人はポーランド人なのでロマ語を習い正確に習得し、即興でセリフが言えるくらいにも。問題は、言語ではなく、文化的な問題で、家父長制の社会ですから女性(監督や衣装さん)から指示されるのはどうしても我慢できない(笑)。しかし徐々に、現在は存在しない自分たちの世界を映画の中で再現していく、それが観客の記憶に残るとすれば、正しいものを伝えなければいけないという使命感を持つようになったそうです。セリフにも「読み書きを覚えたことが不幸せの始まり」とか、少女ブロニスワヴァ(愛称パプーシャ)が生まれた時の暗示も印象的でした。羅馬人独特の文化や秘密保持の理由も考えさせられました。

PAPUSZA | ポーランド映画 | 2013年 | ロマニ語&ポーランド語 | モノクロ | 131分 |

監督・脚本 ヨアンナ・コス=クラウゼ&クシシュトフ・クラウゼ

キャスト ヨヴィタ・ブドニク/パプーシャ、ズビグニェフ・ヴァレリシ/ディオニズィ、アントニ・パヴリツキ/イッジ・フィツォフスキ

あらすじ 書き文字を持たないジプシーの一族に生まれながら、幼い頃から言葉や文字にひかれ、詩を詠んだ少女ブロニスワヴァ・ヴァイス(愛称パプーシャ=人形の意)、激動のポーランド現代史に重なる、実在した女性詩人の生涯を描く。

監督プロフィール ヨアンナ・コス=クラウゼ(Joanna Kos-Krauze) / 1972年12月8日オルシュティン生まれ。ポーランド・テレビでキャリアをスタートさせ、ポーランド・テレビ主催の脚本家のスカラシップを獲得し脚本家としてデビュー。昨年12月24日に61歳で亡くなったクシシュトフ・クラウゼ監督とは、『借金』の脚本に協力したことから知り合い、2000年のテレビ映画『Wielkie rzeczy(素晴らしきもの)』でも脚本を担当。ヨアンナのアイデアで始めた企画『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』では共同製作し、2006年の『救世主広場』から共同監督となる。本作『パプーシャの黒い瞳』も彼女の企画である。さらに、ふたりで企画していた次回作、ポーランドとルワンダでジェノサイドの後にはいかに生きるかを見つめた心理的な映画を撮影する予定。